

(能)

絵

男神 福岡 聡子
女神 松田 若子
姥 佐野 玄宜

シテ 島村 明宏

馬

ワキ 苗加登久治

ワキツレ 平木 豊男

ワキツレ 北島 公之

間 炭 光太郎

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 多田 順子

太鼓 大橋 紀美
笛 室石 和夫

後見 高橋 右任
渡邊 茂人

地謡

高野 秀幸 藪 克徳
水口 純治 佐野 由於
山本 貢伸 高橋 憲正
山崎 健 佐野 弘宜

休憩 二十分

巻

(仕舞)

絹

クセ

藪 俊彦

地謡

高橋 憲正
渡邊荀之助
高橋 右任
田屋 邦夫

栗

(狂言)

焼

太郎冠者 能村 祐丞

主人 炭 哲男

後見 清水 宗治

(能)

鐘

尙

シテ 木谷 哲也

ワキ 渡貫 多聞

間 中尾 史生

大鼓 田中 一義
小鼓 住駒 俊介

太鼓 飯森 友春
笛 矢郷由香子

後見 渡邊荀之助
佐野 弘宜

地謡

米島 和秋 藪 克徳
寺田 茂 広島 克栄
長野 裕 渡邊 茂人
田屋 邦夫 松本 博

能 絵 馬 (えま)

大炊御門おほいのみかどの左大臣公能さんのう(ワキ)は勅命により伊勢神宮に宝物を捧げるため一夜の旅寝をして勢州斎宮の地に着きました(公卿勅使右大臣公能は崇徳天皇の頃の人です)。そこへ泰平の御代をことほぐ老人夫婦(前シテ・ツレ)が現れ、明年の順氣と国土の豊穰を祈って白黒二つの絵馬を宮(作り物)に掛けます。「掛けて」尽くしに言葉を連ねた夫婦は自らを伊勢の内外二柱の神と明かして消え失せました(中入)。月読つきよみの神が明るく照らして、現れ出た男体の神(後シテ)は天照大神を名乗ります。従う女神(後ツレ)は天鈿女命あめのつずめのみこと、男神(後ツレ)は手力雄命たぢからのおのみことです。神舞を舞った大神は日月二つの光を隠した昔の岩戸籠もりを再現して宮の内に入ります。大神の神慮を慰めて男女二神も神楽を舞い、それが面白くて大神が岩戸を少し開けたところを男神が引き明け、外へ連れ出して天地は再び治まりましたが、その昔を大神が楽しく思い出して、国土は豊かに泰平の春も久しく続きます。

狂 言 粟 焼 (くりやき)

伯父から贈られた丹波粟四十。始終仲よくと判じた太郎冠者に焼かせ、そのめでたさに、主人は一族披露を思い立ちます。さて粟を焼く冠者は、焼け飛ぶ粟に驚いたり、目を切られて飛べぬ粟を小歌節で離したり、仕事は仕事で楽しんで、焼き上がった粟のみごときについて試食、一つのつもりを全部食べて、その言い訳に、竈かまどの神三十六人に与えたとし、残りは虫喰い、逃げ粟・追い粟・灰紛れで失せたと説明しますが、もちろん通じません。

能 鍾 馘 (しょうぎ)

唐土終南山たうとくしゅうなんざんの麓に住む者(ワキ)が帝に奏聞そうもんすることがあって都をめざす途中、鍾馘しゆたけの亡心(前シテ)が現れて帝への伝言を依頼します。いにしえ鍾馘は進士しんしへの及第きふだいを志し、かなわずに無念の自殺を遂げました。その時の執心を翻し、娑婆世界の無常を悟って、悪鬼を滅ぼし国土を守る誓いを立てた鍾馘は、帝の賢政に応じて奇瑞をなすから奏聞してほしいというのです。その前に旅人の夢にまことの姿を現そうと予言して、空に坐し火を放ち水を踏んで、山彦のように消え失せました(中入)。その夜、旅人が俗人ながら法華経を誦読して霊を吊うところへ、鬼神を追って猛々まうまうしい鍾馘の精霊(後シテ)が現れ、宝剣をふるって悪鬼を退散させます。鍾馘は自らの悪心を翻して一念發起し、国土・君道を守ると誓ったいわれを語り、とりわけ皇居の隅々にまで鬼神を探索し、通力を失わせて剣で切り刻むものですから、剣の威光は天地に輝き、国土もあまねく治まるのでした。